

I . JAMSTECの概要

① 事業の概要

■ 事業の目的

国立研究開発法人海洋研究開発機構（Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology : JAMSTEC ジャムステック）は、平和と福祉の理念に基づき、海洋に関する基盤的研究開発、海洋に関する学術研究に関する協力等の業務を総合的に行うことにより海洋科学技術の水準の向上を図るとともに、学術研究の発展に資することを目的として、2004年4月に前身の海洋科学技術センターから独立行政法人として発足し、2015年4月1日に国立研究開発法人海洋研究開発機構に移行しました。

【国立研究開発法人海洋研究開発機構法（平成15年法律第95号）第4条】

■ 事業の範囲

- JAMSTECでは主に以下のような業務を行っています。
- ① 海洋に関する基盤的研究開発を行うとともに、その成果の普及、活用の促進を行っています。
 - ② 大学及び大学共同利用機関における海洋に関する学術研究に対して、船舶の運航等の協力・支援を行っています。
 - ③ 科学技術に関する研究開発又は学術研究を行う方に対し、機構の施設・設備を供与しています。
 - ④ 海洋科学技術に関する研究者及び技術者を養成し、その資質の向上を図っています。
 - ⑤ 海洋科学技術に関する内外の情報及び資料の収集、整理、保管、提供を行っています。
 - ⑥ 科学技術・イノベーション創出の活性化に関する法律（平成20年法律第63号）に基づく出資並びに人的及び技術的援助を行っています。

【国立研究開発法人海洋研究開発機構法第17条】

■ 中長期計画

国立研究開発法人であるJAMSTECは独立行政法人通則法により、主務大臣である文部科学大臣からJAMSTECが達成すべき業務運営に関する目標（中長期目標）の指示を受けます。これを基にJAMSTECでは中長期計画を作成し、中長期目標の達成に向けて業務を遂行します。

2019年4月1日から2026年3月31日までの7年間を対象とした第4期中期計画には、機構は、海洋を軸とした地球環境全体、すなわち生命活動をも含めた地球を構成する複雑かつ多様なシステムを「海洋・地球・生命」として一体的に捉え、それらシステムの行く末に大きな影響を及ぼす人間活動との相互影響を含めた統合的な理解を推進し、科学的知見を有用な情報として発信していくことにより、人類社会が地球の未来を創造していくことに貢献するため、海洋から地球全体に関わる多様かつ先進的な研究開発とそれを強力に支える研究船や探査機等の海洋調査プラットフォーム、計算機システム等の研究基盤の運用を一体的に推進し、膨大な観測・予測データの集約・解析能力を向上させ、高水準の成果の創出とその普及・展開を促進することにより、我が国の海洋科学技術の中核的機関としての役割を担っており、機構がこのような役割を果たしてイノベーション創出や、我が国の安全・安心、科学的知見の充実による海洋立国の実現に貢献し、国民からの期待に応えていくため、これまでの取組みを一層発展させ、次に示すような研究開発課題に取り組むと掲げられています。

- ① 地球環境変化の実態把握と人間活動の影響の評価、将来予測、海洋が生み出す生物・鉱物等の有用資源の有効かつ持続的な利用、海域地震・火山活動やそれらに起因する津波といったハザードによる災害対策への貢献等、科学的知見の充実と課題の解決に向けた研究開発の推進
- ② 多様な調査・観測等により取得したデータの統合及び解析機能の強化による、有用な情報の創生と発信
- ③ 次世代海洋科学技術を支える知の創出に向けた挑戦的・独創的な研究開発の推進
- ④ 氷海域、深海底及び海底深部等の多様な海洋環境に対応できる探査・調査能力の獲得に向けた海洋調査・観測技術の高度化等、先端的な基盤技術開発の推進

また、これらの課題を解決していくに当たっては、国立研究開発法人としての成果の最大化を強く意識して、国内外の関係研究機関、産業界、官公庁を始めとする様々なセクターとの連携・協働体制を確立し、国際的なプロジェクトをリードする研究開発を推進するとともに、理事長のリーダーシップの下、内部統制及びガバナンスの強化を図り、多様な人材の育成及び確保に取り組むとしています。

【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/project/index.html>】

② JAMSTECの研究・開発事業

■ 研究・開発事業の概要

JAMSTECでは、我が国及び世界における真の海洋科学技術の中核機関として海洋科学技術分野をリードし、保有する研究開発基盤を十分に活用しながら先進的・基盤的な研究開発を推進するため、研究開発事業を担当する部署として主に6つの部門を設け、研究・開発の事業活動を行

っています。また、各部門の協力を要する総合的な業務を行うにあたっては、部門とは別にプロジェクトチームを置き、迅速かつ的確な業務の推進を図っています。

【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/research/>】

CONNECTING OCEAN RESEARCH WITH SOCIETY 社会につながる海洋研究

JAMSTECは海洋国家の日本において、海の研究を通じて、科学技術の向上、学術研究の発展、地球や生命の理解などに広く貢献するための活動に取り組んでいます。

地球環境の把握、海洋資源の利用、地震・火山活動に関する調査研究を進めるとともに、それらの研究を支える探査機・観測機器の運用や技術開発を行い、さらには、革新的な成果や発見につながる最先端の研究を推進しています。また、研究活動によって得られたデータから新たな価値を生み出し、政策的な課題解決や社会・経済のニーズに貢献するための研究開発を進めています。

地球環境部門

地球環境変化の「現在」を把握し、「将来」を予測するための研究開発を通して国際貢献に繋げる

地球温暖化、海洋の酸性化、プラスチック汚染などの地球規模の課題の解決に貢献するため、国際的な研究プロジェクトなどを主導し、海洋表層から深層まで、さらには海洋にかかわりの深い大気・陸域を含めた統合的な観測を実施し、得られたデータを活用して季節単位や百年単位などの短・中・長期的な将来予測に取り組めます。

研究成果については、国連気候変動枠組条約（UNFCCC）・パリ協定、ユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）、北極評議会（AC）などの国際的なフレームワークを通して積極的に発信し、国連持続可能な開発目標（SDGs）、特に目標13（気候変動に具体的な対策を）や目標14（海の豊かさを守ろう）等の達成や、我が国の政策課題の達成に貢献します。

海洋機能利用部門

海洋における物質の循環と資源の成因を理解し、海洋の持続的な利用に繋げる

海洋に生息する様々な生き物や海洋鉱物資源といった物質。私たちが利用している海洋の資源と機能は、生物、非生物を問わずまだごく一部にすぎません。海洋機能利用部門では、海洋の持続的な利用に資するよう海洋の研究開発に取り組むとともに、深海・深海底などの環境から得られた試料・データ・技術・科学的知見を関連産業に展開することによって、わが国の海洋産業の促進に貢献します。

海域地震火山部門

地震や火山活動の実態を解明し、災害の軽減に繋げる

海域地震火山部門では巨大地震発生や火山噴火が危惧されている南海トラフ、日本海溝、千島海溝など、地震発生帯と言われる日本周辺海域や西太平洋域において、JAMSTECの所有する研究船や様々な海上・海底・海底下観測機器等を用いた大規模観測を実施し、地震、火山活動の実態解明を行います。さらに、新たな解析手法の開発による観測データの最大活用や、大規模かつ高精度な数値シミュレーションにより地震、火山活動の推移予測・将来予測を進めていきます。

また、SDGs目標11（住み続けられるまちづくりを）も念頭に、研究開発により得られた科学的知見を社会に提供することで災害の軽減に貢献するとともに、地震・津波・火山活動による災害が多発する各国への調査観測の展開や研究成果の応用を進めます。

付加価値情報創生部門

地球システムに隠された未知なる「因果関係」を探る

地球システムの変動と人間活動との「相互関連性」を見いだすために、JAMSTECが行う様々な研究開発の過程で得られる膨大なデータを連携するための手法と、連携されたデータを高効率かつ最適に処理するための数理的解析手法を開発します。

また、様々なニーズに適合した情報を創生し、広く発信することで、政策的課題の解決や持続的な社会経済システムの発展に貢献します。さらには本取組を国内外の関係機関へ拡張することで、より高度で有用な情報を創生するためのフレームワークの構築を目指します。

超先鋭研究開発部門

将来を見据えた「挑戦的・独創的」な研究・技術開発

海洋空間という極限的な環境、あるいは地球最後のフロンティアに対し、挑戦的・独創的な研究開発に取り組むことで、将来の「海洋国家日本」を支える飛躍知及びイノベーション創出に向けた科学的・技術的な知的基盤の構築を実現していきます。国民への科学・技術への興味と関心を喚起し、ひいては我が国の科学技術政策の推進に大きく貢献します。また、JAMSTECにおける研究開発の基礎を支え、異なる分野の連携を促進し、課題解決を加速します。

変動海洋エコシステム高等研究所

地球環境の変化に対する海洋生態系の応答・適応メカニズムを解き明かし、その変動予測を実現する

東北大学及びJAMSTECが共同で提案した「変動海洋エコシステム高等研究所（WPI-Advanced Institute for Marine Ecosystem Change：以下、「WPI-AIMEC」）」が、文部科学省の令和5年度世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）の新規採択拠点として採択されました。

WPI事業は、卓越したリーダーのもと、世界から第一線の研究者が集まる「目に見える研究拠点」を形成し、日本の科学技術水準を向上させていくことを目指す事業です。WPI-AIMECでは、北西太平洋を重点海域と定め、海洋物理観測や環境DNA分析などから得られるビックデータを活用し、海洋環境の物理化学的な変化に対する生態系の応答・適応メカニズムの解明に挑みます。さらに、沿岸域からグローバル・スケールの海洋生態系の変動予測を実現し、新しい学術領域「海洋一生態系変動システムティクス」の確立を目指します。

技術研究開発部門

深く、広大な海に、新たな探査・観測システムで挑む

日本は、その周辺を数千m以上の海溝域に囲まれた特異な海洋環境にあり、EEZの面積も世界第6位と広大です。そのような深海域を含んだ広範囲にわたる海洋の探査、観測を行うことは、海洋環境の把握や保全、地震・防災、生命地球科学、地質学などの科学的研究のために不可欠です。これまで、JAMSTECの運用する探査機や研究フリートが、そうした深海探査、海洋観測を牽引してきましたが、今後は、より高度で高効率な探査・観測能力が求められると考えられます。

技術研究開発部門では、高精度化、無人化・省力化、効率化、小型化等に係る工学的な基礎研究や要素技術開発を推進し、システムズエンジニアリングに基づく開発を行って、理学研究のみならず、MDAや経済安全保障にも寄与する新たな深海探査・海洋観測システムの確立を目指して研究開発を進めます。

研究プラットフォーム運用部門

海洋調査研究の最前線を担う

海洋は地球表面の約7割を占め、地球のダイナミックでグローバルな変動の源となっています。そして、海洋地球科学の重要な研究対象は、深海や海溝などの大水深域、地震や海底火山の活動域、海底下大深度の地球内部領域など多岐にわたります。

広大で多様なフィールドに対応可能な海洋調査プラットフォームを運用し、海洋全域を調査・観測する高度な能力の維持・向上を図り、世界をリードする研究開発や我が国の海洋政策の達成に貢献します。

研究活動行動規準

JAMSTECでは研究活動における不正行為などに対応するため、2006年度に「研究活動行動規準」を策定し、これに従い研究活動を行ってきましたが、研究者の不正は今もなお社会的に問題となっており、また2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、研究者の社会への発言に対す

る誠実さがより求められること等を踏まえ、日本学術会議が定めた「科学者の行動規範」（2006年10月3日）を参考に、2012年10月に従来の規準を見直しました。【https://www.jamstec.go.jp/j/about/research_activities/】

研究活動行動規準

独立行政法人海洋研究開発機構（以下「JAMSTEC」という。）は、平和と福祉の理念に基づき、海洋に関する基盤的研究開発、海洋に関する学術研究に関する協力等の業務を統合的に行うことにより、海洋科学技術の水準の向上を図るとともに、学術研究の発展に資することを目的としています（独立行政法人海洋研究開発機構法第4条）。

JAMSTECにおいて研究活動に携わる私たちには、前述の目的を踏まえ、新たな真理を発見し、専門知識や技術を活かして人類の福祉、社会の安全と安寧、そして地球環境の持続性に貢献する責任があります。

研究活動は、いうまでもなく研究に携わる者一人一人の誠実性、自律性を基盤として行われるべきものであり、そこに不誠実性が存在することは許されません。特に科学活動とその成果が大きな影響力を持つ現代において、研究者は常に倫理的な判断に基づいて行動しなくてはなりません。

私たちは、ここに日々の研究活動において常に意識すべきことを、「研究活動行動規準」として制定し、その行動を自らが厳正に律する倫理観の確立を目指します。

1. 研究活動に携わる者として、常に誠実性、客観性、透明性をもって研究活動にあたり、課せられた社会的責任を全うします。
2. 研究活動に係る資金については、社会からの負託の基に供与されているものと強く認識し、適正な申請・管理・執行に務めます。
3. 研究活動における不正（研究に関わる捏造、改ざん、盗用、研究資金の不正使用等）を発見した場合には黙認せず、JAMSTECに所属する者として定められたルールに基づき、適切に対応します。
4. 指導的な立場にある者は、JAMSTECの方針に則り、各々の部門において誠実な研究活動を維持向上できる環境の構築に務め、研究活動における不正の余地が生じないよう、日々適切なコミュニケーションを心がけます。

■ 業務の評価

文部科学省所管の国立研究開発法人であるJAMSTECは、毎事業年度及び中長期計画期間の業務実績について、文部科学省の国立研究開発法人審議会の審議を経て、文部科学大臣により評価を受けています。第4期中長期目標期

間（見込評価）及び令和6年度の業務実績に関する評価の概要は以下のとおりです。

【https://www.jamstec.go.jp/j/about/research_assessment/】

文部科学大臣による国立研究開発法人海洋研究開発機構の 第4期中長期目標期間（最終年度の実績見込みを含む）における業務の実績に関する評価

全体の評価：A

<評価に至った理由（一部抜粋）>

- 以下に示すとおり、顕著な成果の創出が認められ、さらに将来的な成果の創出も期待できる業務運営がなされている。
- 海洋調査・観測プラットフォームが無事故で効率的に運用されており、国内外の海洋コミュニティがそれらのプラットフォームを利用することで我が国全体としての海洋科学技術の研究開発成果の最大化に大きく貢献している。特に、研究力、開発力、実行力を統合しなければ実現できなかったIODP JTRACKプロジェクトに象徴されるように、研究開発成果を最大化するための研究マネジメントが適切に図られている。加えて、これまでの常識を覆す数々の科学的意義の大きい成果が毎年のように示されており、能登半島地震や南海トラフの問題にみられるように政策に反映されるような科学的知見を迅速に提供していることは顕著な成果と認められる。
 - 国際的な枠組みやプロジェクトをリードし、重要な研究成果を数多く創出するとともにIPCCのAR6/AR7のリードオナーを務めたこと、機構が有する高精度化学分析技術が活用され、小惑星リュウグウの帰還サンプルを解析し、その化学進化を明らかにしたこと、IODP JTRACK プロジェクトを主導し、地震発生過程を明らかにするために必要なデータを全て取得したこと、完全版「深海熱水での生命誕生シナリオ」を提示していることは顕著な成果と認められる。
 - 南海トラフ地震臨時情報、マルチスケール気象解析、JTRACK 断層地震の解明など、重大な成果が複数顕在化しているとともに、論文数増加、被引用数の多い論文が継続的に客観的なアウトプットとして質・量ともに研究レベルの高さを示していることは顕著な成果と認められる。
 - 海洋STEAM事業を始動し、令和6年度には海洋STEAM事業推進コンソーシアムを立ち上げ、教育系大学との連携を行うなど本事業を浸透させる取組を行ったこと、防衛省からの依頼による F-35A 搜索航海等に迅速に対応するなど、国及び外部機関からの要請に的確に対応したこと、令和6年能登半島地震の震源域周辺海域における緊急調査に機動的に対応し、全7次にわたる緊急航海を完遂したこと等は顕著な成果と認められる。
 - 令和5年度に策定された理事長マニフェストを皮切りに、内部統制の強化、意思決定システムの明確化、内外の情報発信の強化、プロジェクトマネジメントの体制整備等の様々な取組を行い、総合的にマネジメントの強化を果たしたこと、特に役員を頂点として研究、運用、技術、事務を一体化した長期経営エコシステムを構築したことは顕著な成果と認められる。
 - コロナ禍の逆境のなか、理事長のリーダーシップ・マネジメントのもと、業務の効率化・合理化を強力に推進し、その際に、ボトムアップの力を最大限活かし、トップダウンの施策とシナジー効果を生むよう、柔軟な運営を目指してきた点や、「挑戦的・独創的な研究開発の推進」においてボトムアップによる研究推進が最大限生かし、数多くのブレークスルーの発見に結びつけた点は顕著な成果と認められる。

文部科学大臣による国立研究開発法人海洋研究開発機構の 令和6年度における業務の実績に関する評価

全体の評価：A

<評価に至った理由（一部抜粋）>

令和6年度は、国立研究開発法人海洋研究開発機構の第4期中長期目標及び計画（令和元年度～令和7年度）の終盤となり、機構がこれまでに取得した長期にわたるデータを解析するなど、例年に比べて特に顕著な基盤的研究成果が数多く創出されている。「日本海溝巨大地震・津波発生過程の時空間変化の追跡」（JTRACK）の成功や世界初の発見を含む挑戦的・独創的な研究といった学術的インパクトの大きさのみならず、海上自衛隊哨戒機の搜索や小惑星リュウグウの帰還サンプルの分析、アウトリーチ活動の充実等といった社会的インパクトの大きさも目立ち、特に顕著な成果を多数あげた年度であったと認められる。また、組織運営、体制については、理事長のマネジメントのもと、これまでの課題に対して明確な取組を提示した上で、具体的な対策が取られている。他方、いくつかの項目において課題や改善点の指摘があったことなどから、法人全体の評価としてはA評価が妥当であると判断した。

【評価の区分】

- 国立研究開発法人の目的・業務、中長期目標等に照らし、法人の活動による成果、取組等について諸事情を踏まえて総合的に勘案した結果、
- S：適正、効果的かつ効率的な業務運営の下で「研究開発成果の最大化」に向けて特に顕著な成果の創出や将来的な特別な成果の創出の期待等が認められる。
- A：適正、効果的かつ効率的な業務運営の下で「研究開発成果の最大化」に向けて顕著な成果の創出や将来的な成果の創出の期待等が認められる。
- B：「研究開発成果の最大化」に向けて成果の創出や将来的な成果の創出の期待等が認められ、着実な業務運営がなされている。
- C：「研究開発成果の最大化」又は「適正、効果的かつ効率的な業務運営」に向けてより一層の工夫、改善等が期待される。
- D：「研究開発成果の最大化」又は「適正、効果的かつ効率的な業務運営」に向けて抜本的な見直しを含め特段の工夫、改善等を求める。

③ 組織構成

■ 組織図



(令和7年7月1日現在)

【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/organization/>】

JAMSTECの拠点（事業所）



【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/access/>】

■ 研究船・探査機・施設設備

● 研究船・探査機

● 深海潜水調査船支援母船「よこすか」

全長	105.2m
幅	16.0m
深さ	7.3m
喫水	4.7m
国際総トン数	4,439トン
航海速力	12ノット
航続距離	約9,500マイル
定員	60名（乗組員45名/研究者等15名）
主推進機関	ディーゼル機関2,206kW×2基
主推進方式	可変ピッチプロペラ×2軸



◆ 「しんかい6500」の支援母船

● 海洋地球研究船「みらい」

全長	128.5m
幅	19.0m
深さ	10.5m
喫水	6.9m
国際総トン数	8,706トン
航海速力	11.5ノット
航続距離	約12,000マイル
定員	80名（乗組員34名/研究者等46名）
主推進機関	ディーゼル機関1,838kW×4基 推進電動機700kW×2基
主推進方式	可変ピッチプロペラ×2軸



● 海底広域研究船「かいめい」

全長	100.5m
幅	20.5m
深さ	9.0m
喫水	6.0m
国際総トン数	5,747トン
航海速力	12ノット
航続距離	約9,000マイル
定員	65名（乗組員27名/研究者等38名）
主推進機関	推進電動機2,400kW×2基
主推進方式	アジマス推進器2基



● 東北海洋生態系調査研究船「新青丸」

全長	66.0m
幅	13.0m
深さ	6.2m
喫水	4.5m (ソナー ドーム含め 5.0m)
国際総トン数	1,635トン
航海速力	10.5ノット
航続距離	約6,500マイル
定員	43名（乗組員28名/研究者等15名）
主推進機関	推進電動機1,300kW×2基
主推進器	アジマス推進器2基



● 学術研究船「白鳳丸」

全長	100.0m
幅	16.2m
深さ	8.9m
喫水	6.3m
国際総トン数	4,073トン
航海速力	12ノット
航続距離	約12,000マイル
定員	89名（研究者35名）
主推進機関	4サイクルディーゼル機関1,398kW×4基 電気推進モーター320kVA×2基
主推進方式	4翼可変ピッチプロペラ (ハイスキュー型×2軸×2舵)

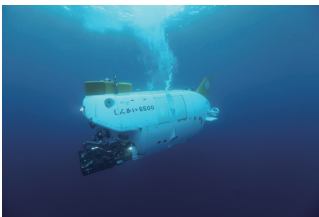


● 地球深部探査船「ちきゅう」

全長	210m
幅	38.0m
深さ	16.2m
喫水	9.2m
国際総トン数	56,752トン
航海速力	8ノット
航続距離	約14,800マイル
定員	200名
推進システム	ディーゼル電気推進



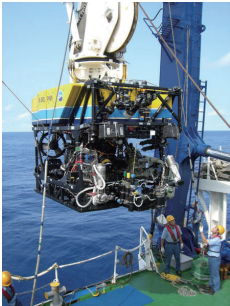
●有人潜水調査船「しんかい6500」

全 長	9.7m	
幅	2.7m	
高 さ	4.1m	
空 中 重 量	26.7トン	
最 大 潜 航 深	6,500m	
潜 航 時 間	8時間	
ライフサポート時間	129時間	
乗 員 数	3名（パイロット2名/研究者1名）	
最大速力	2.7ノット	

●深海巡航探査機「うらしま」

全 長	10.0m	
幅	1.3m	
高 さ	1.5m	
空 中 重 量	約7トン	
潜 航 深 度	3,500m	
航 続 距 離	100km以上	
速 力	0～3.0ノット	
動 力 源	リチウムイオン電池	

●4,500m級無人探査機「ハイパードルフィン」

全 長	3.0m	
幅	2.0m	
高 さ	2.6m	
空 中 重 量	4.3トン	
最 大 潜 航 深	4,500m	
最大速力	(前進/後進) 3ノット/2ノット	
最大速力	(横進/上昇・下降) 2ノット/1.5ノット	

●深海曳航調査システム「ディープ・トウ」

全長数千メートルのケーブルの先端にソーナーやカメラを装備した曳航体を取り付け、海底付近をごく低速で曳航するシステム



●無人探査機「かいこう」

全 長	3.0m	
幅	2.0m	
高 さ	2.6m	
空 中 重 量	5.2トン	
最 大 潜 航 深	4,500m	

施設設備

●地球シミュレータ（横浜研究所）

総演算性能	19.5PFLOPS
総メモリ量	556.5TiB
共有ストレージ容量	ホーム領域：120TB
	データ領域：60PB
	ワーク領域：1.3PB
ノード間ネットワーク帯域	200Gb/s（双方向）



●高圧実験水槽装置

本体水槽内有効寸法	内径：約1.4m×高さ：約3m
試験体収納力 ゴ有効寸法	内径：約1.2m×高さ：約2.7m
最大圧力	147MPa
加圧(昇圧)速度	0.4～3MPa/min
減圧(降圧)速度	0.4～3MPa/min
保持(保圧)時間	0～5
加圧媒体	真水（水道水）



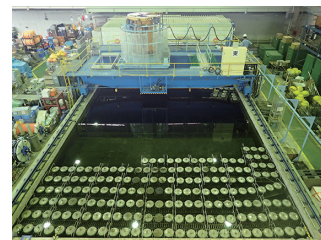
●中型高圧実験水槽装置

本体水槽内有効寸法	内径：約0.6m×高さ：約1.6m
試験体収納力 ゴ有効寸法	内径：約0.5m×高さ：約1.4m
最大圧力	147MPa
加圧(昇圧)速度	0.6～15MPa/min
減圧(降圧)速度	0.6～15MPa/min
保持(保圧)時間	0～5
加圧媒体	真水（水道水）



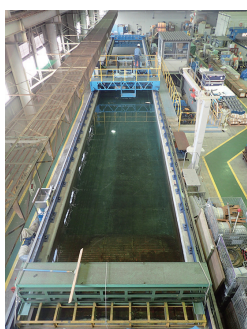
●超音波水槽装置

材質	鉄筋コンクリート
水槽寸法	長さ約9m×幅約9m×深さ約9m
無響装置	壁面（5面）全体に吸音材（マイヤーゴム）を装備（浅い部分を除く）



●多目的実験水槽

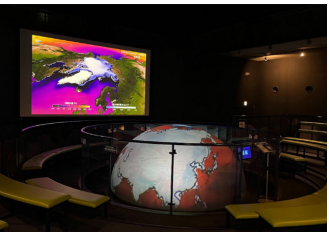
材質	鉄筋コンクリート
水槽寸法	長さ40m×幅4m×深さ2m（一部2.3m）



●多目的プール施設

多目的プール		オープンタンク	
大 き さ	長さ21m×幅21m×深さ1.5m及び3.3m	大 き さ	内径約3m×水深約2.8m（円筒形）
構 造	鉄筋コンクリート（水密）	構 造	鋼製
観 察 窓	0.4m×0.6m（3カ所） 0.6m×0.8m（2カ所） 0.8m×1.0m（1カ所）	観 察 窓	直径0.3m（2カ所）
加 温	水温30℃まで加温可能		
			

●横浜研究所 地球情報館

概 要	横浜研究所「地球情報館」はJAMSTECが行っている研究や観測によって得られたデータ・映像を活用し、一般向けに提供している展示施設です。1階のエントランスホールでは、JAMSTECの研究開発の内容に関するポスター、船舶やスーパーコンピュータ「地球シミュレータ」の模型、深海で採集された岩石サンプルや海ゴミのサンプルを展示しております。1階の映像展示室では、研究調査で得られた深海の映像や全球レベルでの雲の動きや気候変動のシミュレーションの映像等をご自由にご覧いただけます。※説明員等による案内は実施しておりません。 2階には、海洋や地球科学に関する資料を収集し、一般に公開している専門図書館があります。		
開 館 日・ 開 館 時 間	月曜日～金曜日 10：00～17：00		
休 館 日	上記以外の土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始、その他、機構の指定した日		
入 場 料	無料		
			
	エントランスホール展示	地球内部を構成する岩石サンプル	映像展示室

●横浜図書館

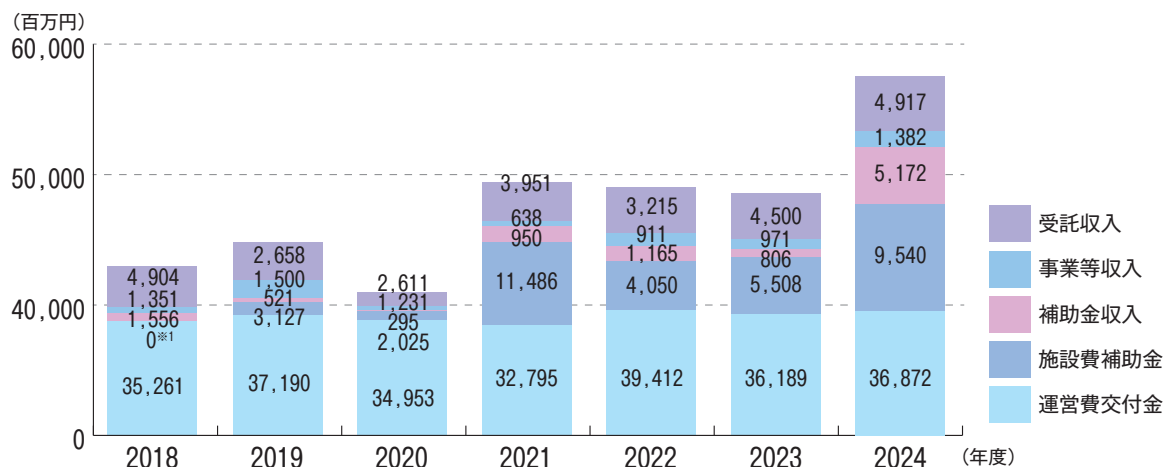
概 要	海洋や地球科学に関する資料を収集し、一般に公開している専門図書館です。一般書、児童書、科学絵本、科学雑誌のほか、機構所属研究者の著書、過去に開催した公開セミナーのDVD等の視聴覚資料も所蔵し、どなたでも自由にご利用いただけます。		
開 館 日・ 開 館 時 間	月曜日～金曜日 10：00～17：00		
休 館 日	上記以外の土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始、その他、機構の指定した日		
			

【<https://www.jamstec.go.jp/j/about/equipment/>】

④ 経営指標

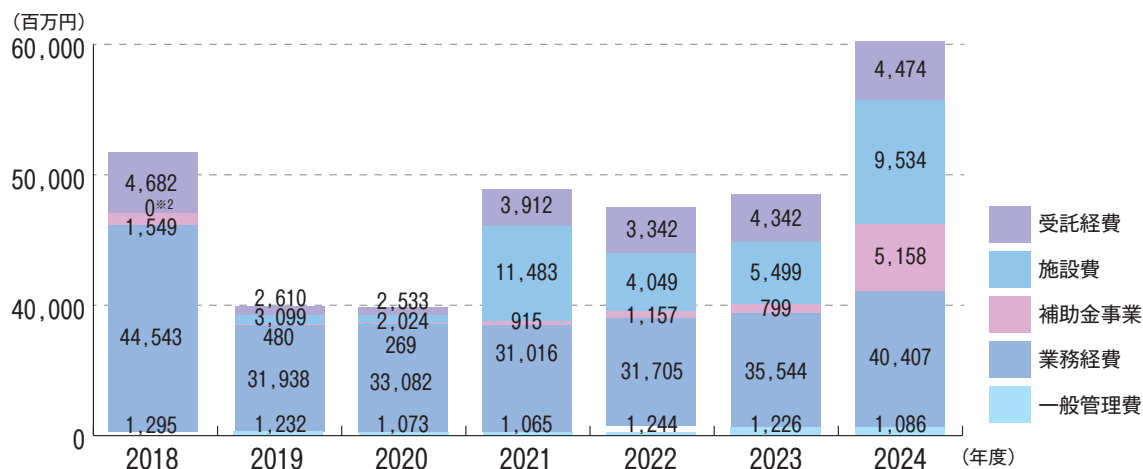
JAMSTEC全体の収入、支出及び人員の推移は以下のとおりです。2004年度より独立行政法人化され、収入及び支出について、以下のような区分で管理しています。

収入



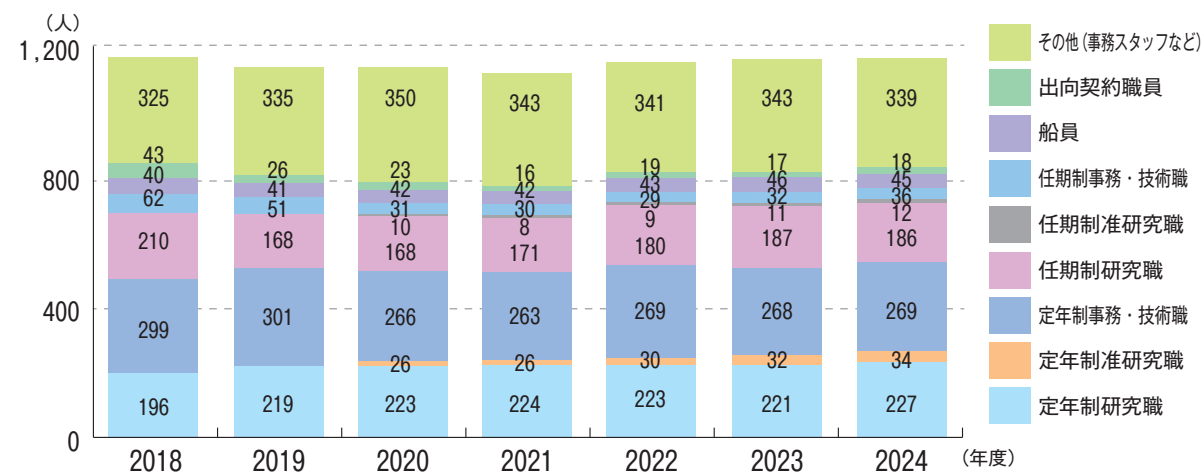
※1 一部事業を翌年度へ繰越したことによる。

支出



※2 一部事業を翌年度へ繰越したことによる。

人員の推移



⑤ 沿革

1971年	10月	「海洋科学技術センター」設立
1981年	10月	「しんかい2000」／「なつしま」システム完成
1985年	5月	海中作業実験船「かいよう」竣工
1990年	4月	「しんかい6500」／「よこすか」システム完成
1995年	3月	10,000m級無人探査機「かいこう」がマリアナ海溝の世界最深部の潜航に成功
	10月	「むつ事業所」開設
1997年	1～2月	ロシア船籍タンカー「ナホトカ号」沈没部調査
	3月	深海調査研究船「かいてい」竣工
	9月	海洋地球研究船「みらい」竣工
	12月	学童疎開船「対馬丸」調査
2000年	10月	「ワシントン事務所」開設
	10月	「むつ研究所」発足
2001年	4月	「シアトル事務所」開設
	10月	実習船「えひめ丸」ハワイ沖引き揚げ調査協力
	11月	「国際海洋環境情報センター」開設
2002年	4月	「地球シミュレータ」世界最高の演算性能を達成
	8月	「横浜研究所」開設
2004年	3月	「しんかい2000」退役
	4月	「独立行政法人海洋研究開発機構」発足
2005年	2月	インドネシア・スマトラ島沖地震調査を実施
	2月	「うらしま」が世界新記録航続距離317kmを達成
	7月	地球深部探査船「ちきゅう」竣工
	10月	「高知コア研究所」設立
2007年	3月	「シアトル事務所」閉鎖
	3月	「しんかい6500」通算1,000回潜航を達成
	9月	地球深部探査船「ちきゅう」による「南海トラフ地震発生帯掘削計画」開始
2008年	2～3月	護衛艦「あたご」と漁船「清徳丸」衝突事故に関する海域調査を実施
	10月	IPCCのノーベル賞受賞に地球シミュレータが貢献
2009年	3月	地球シミュレータ更新
2011年	3月	東日本大震災に関する緊急調査を実施
	3月	「ワシントン事務所」閉鎖
	11月	神戸サテライト開設
2012年	3月	自律型無人探査機「ゆめいるか」「おとひめ」「じんべい」完成
2013年	1月	学術研究船「淡青丸」退役
	1～11月	「しんかい6500」世界一周航海「QUELLE（クヴェレ）2013」実施
	3月	無人探査機「かいこうMk-IV」完成
	6月	東北海洋生態系調査研究船「新青丸」竣工
2015年	4月	「国立研究開発法人海洋研究開発機構」に名称変更
	6月	地球シミュレータ（3代目）更新完了
2016年	2月	海洋調査船「なつしま」、海洋調査船「かいよう」退役
	3月	海底広域研究船「かいてい」竣工
2017年	6月	「しんかい6500」通算1,500回潜航を達成
	8月	「しんかい2000」が「機械遺産」に認定
2019年	6月	日本初の海底探査チーム「Team KUROSHIO」が「Shell Ocean Discovery XPRIZE」で準優勝
2020年	2月	スーパーコンピュータ「地球シミュレータ」が「情報処理技術遺産」に認定
2021年	3月	地球シミュレータ（4代目）運用開始
	7月	「しんかい2000」が「ふね遺産」に認定
	10月	真鍋叔郎博士（プリンストン大学、JAMSTECフェロー）が「ノーベル物理学賞」受賞
	10月	JAMSTEC創立50周年
2022年	2月	深海調査研究船「かいてい」退役

安全衛生・環境配慮活動の取組み

2003～2005年度		海洋調査観測活動に伴う海洋環境に対する影響等の諸調査を実施
2006年	3月	「環境への配慮に係る基本方針」制定
	7月	「調査・観測活動に係る環境保全のための指針」制定
	9月	「安全基本方針」制定
		第1回目の環境報告書を発行
2009年	4月	安全管理の方針等を審議する「安全会議」を「安全・環境会議」に改称
2013年	11月	「音波による構造探査における海洋哺乳類への影響緩和ガイドライン」策定
2014年	4月	「安全衛生及び環境配慮に係る基本方針」制定
2015年	9月	「環境報告書」を「安全・環境報告書」に改称して発行
2018年	6月	「地球温暖化対策実行計画」制定
	12月	SDGsの取組事例を公開開始
2024年	7月	「地球温暖化対策実行計画」改正